
これが俺の魔法学校

りよたかー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これが俺の魔法学校

【Nコード】

N2292S

【作者名】

りよたかー

【あらすじ】

魔法学園生徒10年D組

ジア・ラ・ヴィントが送る魔法学園での生活。

魔法あり、冒険あり、恋愛？んゝ微妙…

とにかく！

異世界での魔法学園での生活が今始まる！

プロローグ（前書き）

以下に注意して読んでください。

これは作者の処女作です。

誤字脱字があるかもしれませんがご了承ください。

またこの小説は不定期連載です。早いときもあれば遅いときもあります。

プロローグ

初めまして、そしてようこそ異世界へ。

ここは、あなたがいる、<その世界>とは違う<異なる世界>よ。

この<異なる世界>では魔法も、魔物も存在するの。

つまり、あなた達の言うファンタジーの世界ね。

ふふっ、あなた、異世界は嫌い？ここには夢の様な世界、好奇心を満たす何かがあるわ。

気に食わないところなんてある？……話がズレたわね。

話を元に戻しましょう。

ここはあなた達の世界の中世にあたる時代感よ。

イメージとして王国が有って、馬車が走り、騎士が国を守っている

……って感じかしら。

ま、多少はあなた達の世界の中世よりはましね。

違うことは<魔法>とか<魔物>ぐらいね。

まあ追い追い話すとうましよう。

下に大きな国が見えるかしら？

これは私立魔法学園セプレパ。

5歳から25歳までの20年間、魔法や冒険学を学ぶ、冒険者の学校よ。

ここには沢山の生徒が居て、日々己を切磋琢磨しているわ。

そして魔物は……化け物でいいわ。

他に説明のしようがないもの。

ふふっ説明はこれぐらいで大丈夫かしら？
解らないなら脳内補完でもしときなさい。

私はあまり親切ではないからね。

もう私は干渉しないわ。

あなた達で好きに観賞でもしてなさい。

最後に言うけど……

異世界を楽しみなさい。

F r o m リ・ディアス

第1話

ある学校の中庭に一人の少年が寝転がっていた。
少年は大きなあくびをした後、ゆっくりと立ち上がった。

「もう、こんな時間か…」

少年はズボンに着いた草や泥を払った。

そして右を見た。

少年の視線の先には石碑の様な物が建っていた。

石碑にはく私立魔法学園セブレパ>と掘ってあった。

ここ魔法学園セブレパは魔法を基礎とする冒険者の学問、冒険学を教える学校である。

「午後の授業、めんどくせえな…」

少年もその生徒なのだ。

午後の授業は薬草の知識を教える授業である。

少年は左に見える校舎に向かって歩きだした。

校舎に入って右にある掲示板に目を通した。たいして目を見張る情報もなくそのまま通り過ぎた。

自分のロッカーを開けて授業に必要な教科書などの本を取り出した。

「ヴェイン、まだ実習教室に行つてなかったの？授業に遅れるよ」

後ろからかけられた声に振り向かずに答える。

「そういう、お前はどうなんだよ」

「Bクラスは午前で授業は終了なの」

「いいよな、上級クラスは」

ロッカーを閉じた。

通称ヴィンは振り返って後ろを見た。

桃色の髪を持つ少女だった。「でも、上級クラスも大変なんだよ」

「万年下級クラスの俺には関係ない話だな」

ヴィンは実習教室に向かって歩きだした。

セプレパではクラスは一学年、5クラスごとに別れており、勉学の良し悪しによつてクラスは振り分けられる。

A B C D EというようにAが最高でEが最低のクラスである。

学期末のテストの順位で基本的に決まるのだ。

またA Bは上級、D Eは下級クラスと呼ばれている。

待遇にもかなりの違いが出るので上級クラスは皆の憧れである。

ヴィンは後ろからついて来る桃色の髪を持つ少女を見た。

この少女は自分と同学年で1学年の頃からの親友である。

名前をリリーという。

「何で後ろからついてくるの？」

ヴィンは疑問を口にした。

「ん……そついや理由なんてないね」

そう言いながらまだついて来る。「授業終わったんなら寮にでも帰ればいいのに」

「ん〜じゃ、そうする」

リリーは後ろに振り返って歩きだした。

「ふう」

あらかじめ言っておくが俺は<ヴィン>と言う名前ではない。
正式には<ヴィント>である。

小さい頃からリリーにはヴィンと呼ばれている。

昔はあまり気にならなかったが、なんだかヴィンって子供っぽい気がするのであまり好きではない。が、なぜ不満を言わないのかというと、もう慣れてしまった性で何度、訂正してもリリーはヴィンと呼んでしまうのだ。

何度言っても変わらないから、最近では「ま、いつか」と諦めてしまった。

授業が終了し、寮に帰ろうとした時だ。

教室の外でリリーが立っているのが見えた。

「帰ったんじゃないのか?」リリーにきいてみた。

「一回帰ったんだけどね…」

時間を見計らってもう一回来てみたの」

「お前も暇人だな」

そっぴいなながらヴィンは鞆を背負った。

「だって…」

「だって?」

「ううん、何でもない」

言いたくないならそれで良いか。校舎の門を抜け帰路につく。

「そっぴいばさあ。リリー、進路届け、どうしたんだ」

「あ、明日提出だったね。忘れてた」

「Bクラスなのに大丈夫なのか?」

「こういう時はBもDも関係ないの!」

「ふーん。で、結局どうすんだ?」

「私は……」

進路届けでは大まかな将来の職業ジョブを決めるのだ。

選択肢は三つ。

戦士。

主に武器を使って戦う職業だ。
魔法使い。魔法を使い何かをする職業。
冒険家。

武力を使わず仕事をする職業。
基本的にはこれから全ての職業に派生するのだ。

「私は魔法使いかな」
リリーが言った。

「まあ、リリーは魔法上手いからな。妥当だな」
リリーは褒められ嬉しいのか笑っている。

「ヴァンは？どうするの？」
「俺か？俺はなあ……」
少し考える。

魔法は上手くないし、冒険家にもなれそうにない。
消去法的に……

「戦士……だな」

「やっぱヴァンは戦士か……」

「む、やっぱって何だよ」

「だってヴァン戦士っぽいもん」戦士っぽいって何だよ、ってシッ
コミが湧いたがスルーする。

「あ、ここでお別れだね」

気づいたらD寮に着いていた。

見た目はぼろっちい。

木で出来た木造住宅である。

使い込まれた感満載だ。

何でも建設当初から建て直されてはいないらしい。

「そっぴやB寮はまだ奥だったな」

「うん、遠いから面倒なの」

「……送っていいこうか」

ビククリした顔でリリーがこちらを見た。

「いいよ別に！後ちょっとで着くし」

「でも待つててくれたし…ついていけない理由がないから」

「待つてないって！」

一度帰ったと言ったが鞆を持っているし、恐らくは帰らずに俺を待つてていたのだろう。

帰ったなら鞆を置いてこれば良いし。

本人が否定するならいいけど。

「じゃあ、何だかB寮が見たくなっだから付いていく」

「ん…なら良いのかな？」

リリーが首を傾げた。

「じゃ、行くか」

ゆっくりとした足並みでおれはB寮へと歩きだした。

第2話

ヴィントとリリーはB寮へと歩み進めていた。

「で、明日からギルドに入らなくちゃダメなんだよね」
リリーが言った。

「ああ、リリーはどこに入るか決まったか？」

<ギルド>と言うのは学園にある部活の様な物でセブレパでは10年生以上は全員入らなければいけないのだ。学園が発注された依頼を学生を使って解決し、報酬の2割を学園が徴収する。

ギルドによって活動方針は違う。薬草などの必需品の採取を行うギルドもあれば、畑など荒らす魔物の退治などをするギルドもあるのだ。

「んゝ私はまだ決まってるないよ。ヴァンは？」

「俺もまだ」

話ながらも二人は歩調を緩めない。

そして約5分歩き続けると、大きな寮が見えてきた。

B寮である。

先ほどのD寮と違い綺麗な外見をしており白い石造りの壁が鮮やかである。

「じゃあ、また明日」

「じゃあな」

ヴィントが手を振りながら来た道に戻って言った。

「おい、アイツ見たか？」

「ああ見た」

B寮の窓から除く三人の男の影が見えた。

一人は筋肉質な大柄な男。

そして痩せた神経質そうな男。

メガネをかけた男だった。

「我等がアイドル、リリーちゃんに馴れ馴れしいよな」

メガネをかけた男が言った。

「ああ同感だ」

筋肉質な男が言った。

「アイツ…しめちまおうか」

メガネをかけた男が言った。

「くっ、行くかぁ、行こうかぁ」痩せた男がにやけた。

「ああ行くぞ…」

筋肉質な男は立ち上がりドアへ向かった。

「家帰ったら何すっかなあ」

一方、何も知らないヴィントはD寮へ歩きはじめたのだった。

第3話

ヴィントは足を止めた。

B寮からの帰り道、道沿いの草むらから3人の男が現れたからだ。

（草むらに隠れるとか……どんだけ暇人なんだよ！）

という考えがヴィントの頭の中に過ぎった。

「てめえの血で雨をふらせてやるぜ！！」

（うわっ…なんて死亡フラグ）

目の前の痩せた男に死相が見えた気がした。

筋肉質の男がこん棒（木製）を持ち、げらげらと気持ち悪く笑っている。

「ふん！！」

男がこん棒を横に振り、木をへし折った。

「死にたくなけりゃああ、もう二度とリリーさんに近づかない事だな！！」

リリーの知り合いかと思ったが、こういう男はリリーが嫌いだと思出し、目の前の男を見た。

明らかな小物3人。

胸につけたバッチを見る限り、自分の一つ上の11学年だと解る。

そしてBクラスの間人だということも。

「嫌ですよ」

ヴィントは否定の言葉を言った。

エモノを持った筋肉質の男は鼻息を荒くしている。

「なら御望通り！！血祭りにい！！」

語尾も言い終わらぬ内にヴィントは筋肉質の男に急速に近づいた。

「……………は？」

筋肉質の男は理解できなかつたらしい。

目の前にいた優男が急に消え、気づいたら自分とぶつかる寸前にいたのことに。

「ふっ!!」

ヴィントは目の前の男の腹部に思いっきり己の拳を打ちこんだ。命中した後ギリツツと音がして確実に急所をついた事を知らせた。

「かつ…!こぶっ…!」

息が一時的に出来なくなつた様で痙攣しながら倒れた。

「ききつ 貴様!何をした!」

メガネをかけた男が言った。

ヴィントは即座に飛び上がった。

「なっ!高い!!」

軽く3mは飛んでいる。

「そおりやつ!!」

ヴィントは踵を振り上げメガネをかけた男に踵落としを喰らわせた。

「ぎゃふっ!!」

メガネをかけた男は地面にたたきつけられた。

「おし!ラストだな」

ヴィントは痩せた男を見た。

「今、引けば許してやる!3分待つから失せる!!」

精一杯の怒気を含め言い放った。

「だっ 誰が逃げるか!貴様のようなDクラスの人間に!

俺様が負けるわけねえだろ!」

痩せた男は腰から赤い宝石の様な物を取り出した。

「魔法石の力はしつてるよな!?魔法の力を増幅させる装置だ!

これで貴様も終わりだ!」

そう言つて男はルーンを唱えはじめた。

『エル・メゲト・エーラ!』

魔法というのは人が持つ魔力というエネルギーをルーンで変換し魔法という行動に変えることだ。

「燃える!ファイア!!」

男の手から野球ボール程の大きさの火球が生まれた。
そして火球は真っ直ぐに動きはじめヴィントに向かってゆっくりと
飛び出した。

「喧嘩にこんなモン持ち出すのかよ……」

呆れを通り越して……哀れだな」

火球は徐々にスピードを上げて、ヴィントに接近していく。

本来、火という物は少しでも生物にとって致命傷になる危険な物なの
のだ。

たかが野球ボール程でも当たれば火傷では済まない。

「ひやはっ死ねえ!!」

男が叫んだ。

「だから……そういうのは……死亡フラグなんだよ!」

ヴィントは右足を後ろに構えた。そして火球が当たる直前に回し蹴
りを放った。

火球は空中で四散した。

「……は?あ……有り得ない……!」

み……認めないぞ!お前みたいな落ちこぼれにこんな事が出来るわけ
がない!」

男は取り乱していた。

「じゃあ、てめえはその落ちこぼれにぶっ飛ばされるんだよ!」

ヴィントが男に接近していく。

「ひっ!」

男が振り返って逃げだそうとした。

「遅いんだよ!」

ヴィントが放った蹴りは見事に男の後頭部に命中した。

男の意識は吹っ飛んだ。

「会長……だれですか?それ」

金髪のツインテールの少女が豪華な椅子に座っている青年が持つ書類を指差した。

「これか…？…期待の新人君だよ」

青年は書類を少女に渡した。

少女は素早く書類に目を通した。「？これDクラスですよ？」

少女は書類を青年に返した。

「成績欄を見なさい」

青年は書類の<成績欄>と書いてある場所を指差した。

「……………ツ！？…これは!？」

セプレパの成績の項目は三つに別れている。

<知識>

冒険に関する知識。

<魔法>

魔法の熟練度。

そして…

「コイツ……………<戦闘>のランクだけではなく抜けて高いですよ!？」

物理での戦闘能力の高さ。

「だろう…？」

セプレパでは成績のランクも5段階評価と+・-である。

そして書類の人物は……………

<知識>……………E+

<魔法>……………E-

そして……………

<戦闘>……………A

「よくここまで偏りましたね」

「まったくだ」

通常、成績でAは付かない。

第4話

「よっと」

ヴィントは先ほど襲ってきた3人の男を担いで道脇の木の下に置いた。

3人の男は皆、気絶していた。

「ったく、とんだ災難だな」

そして元通り何事も無かった様に帰りはじめた。

ヴィントはD寮の前に立った。

少し前にB寮を見たため凄くボロっちく見えた。

まあ実際、ボロいのだが。

「ただいまー」

ドアを開けて中に入った。

ドアは錆びており動かすとギィと鳴った。

「お帰りヴィントさん、遅かったわね」

女の人が声をかけてきた。

「ちよつと友達をB寮に送ってたんですよ」

「それって、まさか……女の子？ああ！ちよつと見ない間にヴィン

トさんも成長したのね!？」

「止めてくださいミラさん……」女はヴィントに抱き着いていた。

照れたようにヴィントは外そうとしている。

ミラはB寮の寮長で実は学生でもある。

セプレパは寮の管理を学生に任すのだ。

ついでに第18学年のDクラスで今年で23歳である。

「あら？ヴィントさん怪我したの？」

ミラは足元の擦り傷を見た。

「あ、うん。ケンカしてさ…」

「だめじゃない…ほらちよっとジツとしといて
そうやって、ヴィントの動きを止めた。」

『エル・エラ・ジーロ』
ルーンを唱え始めた。

「ヒーラー！」

ヴィントの傷口が塞がった。

「やっぱスゲーよな、ミラさん。」

そういつてヴィントは足を振ってみた。
異常はない。

「これならBクラスでも行けたんじゃないの？」

「ダメよ…だって魔法しかよくないもん」

ミラはシヨンボリとした。

「あつゴメン…」

気まずい空気が流れた。

「ん？ヴィント、帰ってたのか」

二階からポーンッシュな女が下りてきた。

「帰ってきたのならそうと教えなさいよね！」

ポーンッシュな女はヴィントを指差した。

「だって今、帰ってきたとこだし…」

「はあ？」

女はヴィントを睨んだ。

「問答無用よ！バカ！」

女は罵声を放った。

「なんで…」

「何？」

女がこつちを睨み付けた。

これでは迂闊に喋ることが出来ない。

「ミラ姉、アレ有る？」

「ああアレね？」

ミラは立ち上がり、引き出しから大きな袋を取り出した。
ヴィントは理解が出来なかった。

「あんまり使うと体に悪いわよ」

そう言つてミラは白い粉が入った袋を渡した。

「！？何それ……まさか……」

ヴィントは恐ろしい考えに身を震わせた。

「何考えてんのよ！このバカ……！」

女がヴィントにゲンコツを落とした。

「プロテインよ！プロテイン！」

そういつて袋を持って2階へ上がった。

「いててて……」

「エイカちゃん今イライラしてるの。少しほっとくのが無難よ」

エイカとは先程のボーイッシュな女の子の事で学年は9学年とヴィントの一つ下である。

趣味は筋肉増強、特技はバーベル上げと少々怖い少女である。

あまりゴツクは見えないが、恐らく凄まじい程絞り込まれているのだろう。

何かと男性（特にヴィント）をバカ呼ばわりする。

「もうとりあえず部屋に帰るよ」ヴィントは立ち上がって2階にある部屋に向かおうとした。

まだゲンコツの痛みは残っている。

「あっそういえばジックが呼んでたわよ」

「ジックが？」

ジックはヴィントの同学年の10学年生で知識の量が強大な博士の様な男である。

<知識>ではB+を取るなど知識面に置いては完璧だが、魔法と運

動神経が低いためDクラスとなっている。

「じゃあジツクの部屋に寄ってから行くよ」
そう言っってヴェイントは2階に上がった。

第5話（前書き）

第3話が二つになってました…

スイマセンでしたm(____)m

以後こんな事ないように気をつけます。

第5話

ヴィントは今、D寮のある部屋に来ていた。

部屋のドアには<ジツクの部屋>と書いてある看板が掛かっている。

またドアには大量の貼り紙が貼つてあり、<入るな危険！>やら、

<命を粗末にするな！>など書いてある。

余程ジャマされるのが嫌らしい。

「おーい！ジツク、入るぞー」

ドア2、3度ノックをしてからヴィントはドアを開けた。

中にはメガネをかけた青年がいた。

青年はぶ厚い本を持っていた。

「やあ…ヴィント、遅かったね」

「わりいな、ジツク。ちよつと野暮用があつてさあ」

「……それはケンカかい？」

「よく解つたな」

「ふっ…当然さ」

そう言つてジツクは読んでいた本を閉じた。

「何読んでんだ？ジツク」

「これか？」ジツクは本を持ち上げた。

「<錬金術の幾何きか>という本さ」

言われてもヴィントは良く解らなかった。

「で、呼んだ理由は？」

「ヴィント…お前どこのギルドに入るか決めたか？」
疑問に疑問で返された。

「いや、まだ」

「そうか…」

ジツクは悩む様なポーズをした。

「どうした？」

「…ああ何でもない」

焦らされている。

「あのさヴィント」

「なんだ？」

「お前：<スレイヤーズ>に入る気はないか？」

<スレイヤーズ>というのはギルドの名前で大手のギルドである。主に魔物を狩る任務を受注するギルドだ。農作物を荒らす魔物から、巨大な鬼の様な魔物まで、様々な魔物を相手にしている。

「別に良いぜ」

「良いのか？まだ時間は有るんだぞ？」

「どうせ明日までだ…それに結構あそこは俺にあつてる気がするし」

「じゃあさ、一緒に入会試験を受けにいこうか」

「ああ…あつと。そういえば一人まだ悩んでる奴いたし、そいつ連れて来るよ」

ヴィントはリリーの事を思い出した。

「マジか…ま、知ってる奴が多い方が良いよな」

その言葉を最後にしてヴィントは部屋を後にした。

第6話

「……………」

ある部屋に机が並べられていた。

ヴィントは目の前にある書類を睨みつけた。

(やべえ…全然解らねえ)

書類には様々な分野の問題が敷き詰められていた。

「で、どうだったの結果？」

ミラが机に突っ伏しながら言った。

「私は合格したよ！」

リリーがはしゃいでいる。

「僕も……おい、ヴィント、ちょっと、こっちに来てい」

ミラと同じく机に突っ伏すヴィントの襟元を掴み引つ張った。

「…おい何でリリーさんが一緒だったんだ？なにかエグい事でもしたのか？」

「してねーよ！知り合いなんだよ、昔から」

ヴィントがジックを殴った。

「でもさ…学園5本の指に入るアイドルだぞ……そんな繋がりがあ
るなら前々から俺に教えとけよな」

ギルド<スレイヤーズ>の入団テストは二種類、「筆記」がまずあ
り、筆記に合格できなかった者の「実戦」がある。

「で、ヴィントさんは？」

「……………」

「？ヴィントさん？」

ミラが首を傾げた。

「まあ分かってた事だし」

ジックが机にもたれ掛かった。

「不合格……」

ミラが固唾を呑んだ。

「飛躍しすぎです！まだ落ちたわけじゃじゃないし、まだ実戦があるもん、ねえ？ヴァン」

ヴィントは苦笑を漏らす事しか出来なかった。

野原にリングが一つあった。

「只今からスレイヤーズの実戦テストを行う！ルールは相手に合格と言わせるか気絶するまで！」
リングに一人の男が上がった。

リドウィン、魔法学校17年生Bクラス。

スレイヤーズの幹部であり、二枚目である。
すらつとしたボディ、腹筋や背筋や肩などからは、実力が伊達では無いことを示すように筋肉があった。

「俺様がこのテストの相手になってやる！面倒くせーからまとめてかかってきてもいいぜ！」

リドウィンが声を張り上げた。

「…まずは実力拝見っ」と

ヴィントはあえて見学をする。

最初に行くのは無謀だ。

「俺が行く！」

筋肉マツチヨな男が声をあげた。

「あいつどつかで見たような………？」

ヴィントは忘れていたがこの男はリリーを溺愛する男であり、かつてヴィントを襲った男である。

一方、何も知らないヴィントは戦士達の勝負を見守る。

「おし、ハンデだ！一歩も動かず潰してやろう！」

「んだと？貴様！？」

男がリドウィンに突進した。

男はそのまま体を捻りだす。

そして一瞬にして戻し、反動で右腕を横に^な屈んだ。

右フックを凄まじいスピードで繰り出す。

しかし、その一撃はリドウィンに命中した途端、威力を失った。

「きかねえな！パンチってーのは！」

リドウィンは全身の筋肉をバネのように使って右腕を突き出す。

「こうだ！！」

その一撃に自分の体重をかける。男の胸に命中し男を弾き飛ばした。

弾き飛ばされた男は3〜4m程飛び壁に打ち付けられた。

ヴィントを除く群集がざわめく。(B……ってどこか……)

実力を見積もる。

恐らく試験用に実力を抑えているのを感じながらヴィントは体がウ

ズズして仕方が無かった。

ヴィントは震えた。

それは恐怖からではない、歓喜からだ。

人間の持つ闘争本能、強い奴と戦いたい、という想いが全身に巡る。

「次は…俺が行くか…」

第7話

リドウィンは目の前にいる黒髪の少年を見た。

その少年は一見優男に見えるが、明らかに他の候補生と違う気迫を感じた。

一流の戦士と対峙した時に感じるプレッシャー。

濁流の様に押し寄せる重圧。

「久々に…楽しめそうだな」

リドウィンは独り言を言った。

リングの上に乗ったヴィントは深呼吸をした。

落ち着く、恐らく試験官のリドウィンは実力では自分の上を行っている。

（相手が強ければ強いほど…俺は楽しめそうだが）
自分の中にある闘争本能が疼く。

戦え！

戦え！！

戦え！！！！

早鐘の様に鳴る心臓を落ち着かせた。

焦ったら負けだ、冷静に攻めろ。

そうやってヴィントは自分に言い聞かせた。

試験が始まった。

まずは小手調べとしてヴィントは右のジャブを素早く放つ。

リドウィンは難無く回避した。

リドウィンはそのままフックを放つ。

間一髪の所でかわし距離を取る。

「なるほど…」

理解したかの様にリドウィンはヴィントを見た。

そして素早く接近した。

（速い！？）

良く見るとリドウィンの足元から風が吹き荒れていた。

強化魔法。

魔力で己の体の性能を上げる魔法。

ルーンが無い異種の魔法である。

「ていや！」

リドウィンの右ストレートがヴィントのガードを崩した。

（なんてパワーだ！）

蹴りを放ちながら接近しフックを放つ。

強化魔法はスピードも強化する。

相手の拳を全て避ける。

リドウィンは右フックをヴィントに放った。

当たった。

「がはっ！」

威力を殺し切れずよろける。

その隙をリドウィンは見逃さなかった。

「いくぜ！おらあ！」

移動した右腕を戻し、肘打ち。

「おら！おらあ！」

右手でかち上げ、アッパー。

「オラ！オラオラ！！オラアアア！」

ストレート、裏拳、そしてまたストレート。

凄まじい速さで打たれる技の数々。

ヴィントはそれを回避しながら距離をつめる。

そして相手の懐にもぐり腹部に蹴りを入れた。
リドウィンが姿勢を崩す。

そこにヴィントはタツクルで吹っ飛ばした。

「はあはあはあ……」

息切れをしていた。

リドウィンが何事も無かった様に立ち上がる。

「やるな、小僧！ご褒美に良いもん見せてやる！」

そう言つてリドウィンは両手を突き出した。

「俺様、108の奥義の一つ！」

素早く接近し射程内に入った。

『牙狼槍カウシツウ！…！』

両手の突きが繰り出され、見事に右手は首を左手は腹部を撃った。

その一撃は狼に噛まれた羊のような印象を持たせた。

そのまま4m程ヴィントは吹っ飛び、ポールに当たった。

完全に気を失った。

「会長、やはりリドウィンが勝ったようです」

「やはりか……」

ある一室に少女と青年がいた。

「最初はリドウィンが押していて均等より少し傾いた程度。恐らく、

強化魔法を使わなければヴィントが勝っていたでしょう」

少女が青年に書類を渡した。

「やはり強化魔法を覚えてなかったのか……」

「ですが、一応合格との事で今後も期待が出来そうです」

青年がい椅子から立った。

「やはり因子が必要ですね……」

彼を送り出してください」

「了解しました」

少女がうやうやしく礼をして部屋を出た。

一人、青年は窓の外を見た。

「さあ、吉と出るか凶となるか…ふふっ楽しみですね…」

第8話

目を覚ますとそこは病院だった。

恐らく、俺は試験官に負けたのだらう。

今はただベッドの上にいるしかない。

体は重く自由には動かせない。

「はあ」

ため息もつきたくなる。

相手が強かった事を見抜けなかったのが不覚。

心の奥で少しは油断もあったのだらうか。

いや、単純に強かっただけなのだらうか。

そうこう考えてる内に、夕方になってる事に気付いた。

そういえば…合格なのか不合格なのか解らない。

少し立ってみた。

うん、行ける、歩ける。

問題は無い。

この病院はセプレパの保健室であり、治療費などは学園が払ってくれるそうだ。

今までこんな場所に送られたのは初めてだった。

「寮に帰るか…」

そのままB寮に向かって歩き始めた。

「合格おめでとう！ヴィントさん！」

どうやら取り越し苦労だった用だ。

玄関を開けるとロビーには ミラさんがいた。

「合格できたんですか？これが？こんな馬鹿が？」

よく見たらエイカがいた。

「まあね」

誇らしげに言った。

「……褒めてないケド」

エイカがボソツと言った。

「とにかく！これを渡しておいて！だって」

ポケットから何か小さなカードを渡された。

「本人の認証に必要らしいの」

「ふーん」

とりあえずカードを無造作にポケットに入れる。

「明日から…か」

初のギルドだ。

楽しみな気持ちと、緊張が混じり合う。

「ま、明日になってからの楽しみってことで」

話を切り上げ、自分の部屋に帰った。

第9話

次の日。

俺とジック、リリーはギルドの案内書に書かれた場所に行った。

魔法学園セブレパは主に7つの校舎がある。

「座学棟」

「魔術棟」

「実践棟」

「ギルド棟、北館」

「ギルド棟、南館」

「教師棟」

「生徒会棟」

の7つである。

俺達が行った場所はギルド棟、南館だった。

かなり大きな建物だった。

そこには数多くのギルドがあった。

「錬金術研究会」やら「魔術訓練ギルド」など様々である。

その中5階まである中の2階。

通常、ギルドは1〜2部屋しか使わないが、「スレイヤーズ」は3
7部屋も使っていた。

それだけで、このギルドの大きさが分かる。

呼び出された部屋には「初心者指導室」と書いてあった。
中には誰も居なかった。

「あれ？なんで誰も居ないのかな？……場所間違ったかな……」
リリーが不安そうに呟いた。

「しかし本当に誰もいねーな」
辺りを見回す。

客観的に教室というより倉庫を思わせる出来だった。

本棚がたくさんあり、本はホコリっぽい。

ふと正面を見ると机の上に人形が置いてある。

赤い髪の毛、紫色の先が二つに別れた帽子。

ピエロかな？と思った。

「……ア……」

変な声でした。

「ん？なんか言ったか？」

「ケケツ」

不気味な笑い声ができる方を見るがそこには人形しかない。

「何：これ？」

リリーが机に置いてあるピエロの人形を触った。

その瞬間、人形が飛び出しリリーに抱き着いた。

「ひゃっ！」

リリーが必死に外そうとするが取れない。

「アア：オッパイデツケエ！」

人形が喋った。

「リリー動くなよ！そいつは俺が外す！」

ヴェントは思いつ切り人形にしがみついた。

それをジツクはただ呆然と見つめている。

「そらっ！」

引っ張った。

「ひっ！やめっ！あ！」

リリーが妙に高い声をだした。

やはり、ジックはこちらを見て赤面している。

「イチドクツツイタラ！ハナシマヘンデ！」

リリーの胸にくっついたままピエロの人形が舌を出した。

「やろう！てめえ！絶対に外してやる！」「ちよっ、ヴァン優し
言い終わらぬ内に思いつ切り引つ張った。

ビリビリっと言う布が裂ける音がした。

人形を潰したか？と思ったが人形は壊れていない。

「ムフツ！」

人形がにやけ、リリーが居るはずの方向を見た。

そこにはカッターシャツの丁度胸の辺りが破け…ピンクのブラが姿
を見せていた。

ジックはあちらで鼻血を出している。

「あ！」

リリーが胸元を隠した。

「ごめん！わざとじゃ…」

言い訳しようとしたらリリーが近づいて来る。

リリーは乙女の恥ずかしさと鬼のような怒りを持った表情である。
見れば解るがヤバイ。

そして右手を振りかぶって……

「ヴァンのバカーー！」

リリーの鉄拳がヴィントの顔面に直撃した。

第10話(前書き)

遅れてすいません！m()m
また少し短いです。

第10話

ヴィントが鼻血を拭き取っている。

「ごめんね…ヴァン」

リリーが申し訳なさそうに謝った。

「いや、良いんだよ、もう……でコイツ…どうする」

ヴィントは話題を変えてピエロの人形を指差した。

ピエロ人形はジックによつてロープでグルグル巻きにされていた。

…あれ？よく見るとジックが鼻にティッシュを詰めていた。

「ハナセ！ハナセ！！」

人形が暴れている…が、身動きはとれないようだ。

「とうか、コイツ何物だんだ？………魔物か？」

ジックがピエロを小突いた。

「オレハ精霊ダ！」

「精霊？」

ヴィントは胡散臭そうな顔、リリーはイラッとした顔をしている。

「嘘だろ？」

ジックがピエロを叩いた。

「精霊ハ魔物トハチガウ！イヤツダ！」

「精霊が良い奴だとしても、お前が精霊という根拠にはならん。

むしろ余計にお前が精霊ではなくなる。」

ジックがピエロの頭を引っ張った。

「サツキカラタクナ！オコルゾ！」

ピエロが暴れたが攻撃はジックには届かない。

「で…結局、お前は何なんだ？」

ヴィントが尋ねた。

「ダ・カ・ラ、イツテナダロ！精霊イナノ！」

話が進まない、と思い一応、信じてやる。

「で、その精霊さんが何でココに居て、セクハラしてんだ」

「オレハチヨットマエニココニキタガ体ガナカッタんだ！ダカラココニアルピエロノ人形にハイラナクチャイケナカッタんだ！」

片言で聞き取りにくい。

「お前：精霊なら何か出来んだろ？何かやって見る。

そしたら信じてやる……かもしれない」

ジックがピエロ人形のロープを解いた。

「ヨシ！ナラ！」

ピエロ人形の体から水が出た。

「オレハ水ノ精霊ナンダ！コンナコトモデキンゾ！」

ピエロ人形は器用に水を操り空中に大きな水の玉を作った。

「はあゝスゲエな」

あまり感心なさそうにジックが言った。

「ナンダヨテメーラ！…コーナツタラ絶対ミトメサセテヤルカラナ
！」

人形が窓の外に出て行った。

「何だっただんだろ…アレ」

たくさんの疑問を残し、変態ピエロ人形は飛んで行った。

「よく考えたらまた来る様な事言ってたな」

ジックが思い出したかの様に言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2292s/>

これが俺の魔法学校

2011年4月27日09時04分発行